それは全国的なうごき

工業地帯の開発

太郎　おじさん、今日は！

——　やあ、太郎君か。よく来たな。さあおあがり。どうだね、二学期も始まったが、勉強の方は？

太郎　涼しくなつたんで、バリバリやつていますよ。今日はネ、おじさん、ちよつと難かしいことをお尋ねしにきたんです。

——　ナンだい、それは？

太郎　おじさんは県庁で企画のお仕事でしよう。だから、このテーマをお尋ねするにはもつてこいだと思うんですが……というのはですね、最近クローズアップしてきた有明臨海工業地帯の開発や、八代その他県内の臨海工業地帯の開発がどうなつているか？……ということです。

——　その問題はおじさん達が、いま一生懸命やつている仕事なんだよ。これは熊本県にとつて、非常に大切なものだからね。さすがは高校三年生だ。えらいテーマを探し出したもんだ。

太郎　おだてちやいけませんよハハ……

——　ハハ……、では、何から話そうかな。ここに写真があるから、これを見ながら説明しよう。

太郎　ではまずはじめに、近頃よその県でもこのような工業地帯開発の熱が高まつてきているようですが、その辺の事情から……

——　それは端的に云えば、その県やその地方の産業構造をできるだけ近代化して、住民の所得を引き上げようと云うのが目的なんだが、一面では、君もしつているように、日本の工業生産が、昭和三十年以降神武景気とか岩戸景気とか呼ばれて急激に膨脹し、京浜、阪神、中京、北九州の四大工業地帯などに工場が余りにも集中したんだな。

その結果、今ではそれらの地帯では工業用地とか工業用水、あるいは陸上輸送など、工業立地条件の面でこれ以上工場の受け入れが難しいような事態に直面しているのだ。そこで、政府でも、新しい工業地帯の開発を考えなければ、所得倍増計画などにも支障をきたすような事態になつてきていることが大きな刺激になつていると思うね。わかるかね、太郎君。

工場の九〇%が臨海地域に

太郎　わかります。それでは、各地でやつている工業地帯の開発が、臨海工業地帯と云つて、地先海面を埋立てた処に工業地帯を計画するといういき方が殆んどのようですが、内陸の平野部では駄目なのでしようか。すぐに使えて手っ取り早いとも思うのですが……。

——　うまいところに気がついたな。それは良い質問だよ。一概に内陸部は駄目ということは云えないな。早い話しが、県内でも熊本市など幾つかの工場が集まつている。

これは原則的には工場の種類、規模によつて定まる問題だが、また日本の国土が狭いため、農地や住宅地との競合が起ること、それに、工場が集団化してきたことも考えなければならない。

もともと日本の工業生産は、君もしつているとおり、原料の大半を外国から輸入し、生産加工して製品を輸出するという形態をとつている。そのため港湾の周囲に工場があることが何かにつけて有利な訳だ。

統計的に日本の工業生産を臨海工業地帯と、内陸部とに分けて見てみると、前の方が実に九〇%以上も占めているんだ。また技術革新の洗礼を受けて最近の工場規模はます〳〵マンモス化しており一つの工場で二〇〇万、三〇〇万平方㍍という工場用地を必要とするようになつているが、こんな工場を、いちいち農地をつぶして建てゝいくということはとても難かしい。

太郎　なるほど。それでは具体的に県内の有明や八代の臨海工業地帯の問題について話して下さい。この開発を考えるようになつたいきさつはどうなんですか？

——　事の始まりから云つて、まず八代の問題から説明しよう。君も見学に行つたと思うが、八代には前から日本セメント、十条製紙、興国人絹、三楽酒造という四つの大工場があつて、県内工業生産額の約四分の一にあたる百七〜八十億円の工業生産を挙げている。

それにもかゝわらず、戦前は球磨川の河口を利用した蛇籠（じやかご）という船溜り程度の港しかないんだ。だから、産業経済が発展するにつれて、貧弱な海上輸送の面が隘路になつてきたんだよ。そこで昭和二十三年度から現在の内港の修築に手をつけ、埋め立てを始めるようになつた。

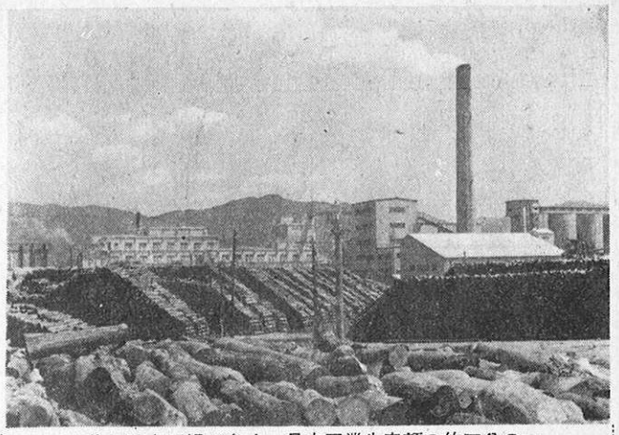
■八代臨海工業地帯

その開発のいきさつ

太郎　では大きな船も入港できるようになるんですね。

——　うん、それがね、計画は一千屯級までの船が横着けできるようなものであつて、蛇籠港から見れば、当時としては一応画期的な計画だつたわけだ。ところが計画半ばにして、さつき話した神武景気に見舞われ、工場の拡張は続くし、海上貨物は増加する一方となつた。

しかもセメント、糖蜜など、工場の原材料や製品で大型船で輸(移)出入しなければならないものは、三角港などを仲継ぎしなければならない実情で、輸送費はかさむし、新しい産業の発展もあまり望めそうもない状態となつたんだね。



八代には大工場が多く、県内工業生産額の約四分の一にあたる170〜180億円の工業生産をあげている……

太郎　あゝわかつた。それで今度は時勢にマッチした港の再検討と抜本的な整備が必要となつてきた……というんでしよう。

——　そうなんだ。君もなかなか難かしい言葉を知つてるんだなハハハ……。

太郎　それはそうですよ。おじさんのオイですからね。ハハハ……。

——　ハハハ……これはやられた。おじさんたちは、つい難かしい言葉を使いがちだからなあ……えゝと、どこまで話したかな。

そうそう、そこで三十三年度から内港とは別に、新たに八代港干拓計画地の地先に、一万屯級の大型船が接岸できる外港の建設に取りかゝつたんだ。

そうして、これと併行して、臨海工業用地の造成も進めているというのが現状なんだ。

だいいち工業用水は豊富だし、地先一帯は遠浅で、今後さらに埋め立てていけば、広い工業用地の造成もできる土地柄だから、今後の発展が楽しみというわけだ。どうだ、わかつたかね。

太郎　わかりました。八代臨海工業地帯の将来は実に大したものですね。ところで有明地域の方はいかがですか。

有明地域開発のいきさつ

——　有明地域は、最近よく新聞等でも報道されているので、君もよく知つていると思うが「有明製鉄」の臨海工場新設計画の具体化が直接の動機なんだ。

太郎　といいますと……？

——　有明製鉄はね、昭和三十二年に熊本市に誘致した「西日本鉄鋼」という、砂鉄を原料として電気銑鉄を作る工場を母体にして、今年の三月新らしくつくられた会社なんだ。その西日本鉄鋼が昨年頃からやつていた有明海底の砂鉄調査の結果から、ぼう大な埋蔵量があるという確信を得て、製鉄工場の新設を計画するにいたつたというわけだ。

いままでの調査では、四千万屯以上の埋蔵量が確認されている。引続きなお調査は進められているよ。

太郎　四千万屯とはすごいですね。ところで県はこれに対してどんな対策をとつてるんですか？

——　県でもね、会社の新発足と同時に「有明臨海工業地帯開発調査本部」を設け、まず工業地帯の建設適地としてあらゆる調査結果に基づいて長洲地域を選定するとともに、有明製鉄の工場計画、その他関連産業の誘致問題などをにらみ合わせながら、具体的なこの地域の開発計画を固めていこうとしている訳だ。

有利な立地条件

太郎　そうですか。大へんな仕事ですねところで変なことをお聞きしますが、これまで長洲地域などでの臨海工業地帯の開発は考えられていなかつたようですし、今のお話しのように、有明製鉄の誘致から急に問題になり始めたということのようですが、もともと、あまり立地条件の良い処ではないんぢやないですか？

——　なかなか手きびしいね。だがそうではないんだ。今回調査をやつてみて認識を新たにした点もあるんだが、もともと、有明海の沿岸地域は、遠浅で大規模な用地造成ができる。

特に長洲地域では、海底下に浅く洪積層があつて、重構造物の基礎地盤としても十分耐え得る「地耐力」をもつているという大きな強味を持つているんだ。しかも前面は急に水深が深くなつていて、四〜五万屯級あるいはそれ以上の大型船でも横付けできる港湾も建設し易い。

また工業用水についても、地下水が相当豊富なうえに菊池川、木葉川の水もあり、さらに近くには三池炭田も控えているという具合で、むしろ有利な条件は多い訳だ。

これまではナゼ？

太郎　なるほど、良いことづくめのようですね。ぢやあ、なぜ今日まで工場適地として浮び上つてこなかつたんでしようか。

——　追求いよいよ急だね。それはね、それなりに決め手となるものが見つからなかつたことと、一般によく指摘もされるが、日本の中央市場から遠く離れていること、それに戦後は燃料としての石炭が採の魅力が次第に低下したので、石炭が採れるというそれだけの条件では、なかなか工場を引きつける力とはなりえないようになつてきたことなどが原因となつていたと考えられるね。

しかし前にも述べたように、既成工業地帯のゆきづまりから、地方の工業適地が注目され始めているときでもあり、これを契機に、一般的にもこの有明地域は見なおされるようになつてくるものと思うね。

太郎　なるほど。大変よく判りましたよおじさん。それでは次に、この八代と有明両地域の工業地帯としての開発、整備計画全般についてどうなつているかお尋ねしたいのです。有明地域については、先程これからだと云うようなお話しもありましたが……。